

昭和二十九年三月二十五日発行（毎月一回・十五日発行）郵便認可

（通第三〇九号）

# 慈

# 光

第二十七卷

第三号

次 求 道 の 中 心 向 近 角 常 観 (1)  
大 悲 回 向 近 角 常 観 (1)

目  
63.8.14

念佛は時と処を超えしめる	松本解雄	(9)
松本解雄教授を弔す	花田正夫	(14)
西方の淨土	山本晋道	(16)
抄	木村無相	(22)

# 大悲回向

## 近角常観

前來しばしば述べる如く仏陀の恵みがわが心に到つて下さつたところが信仰である。私自身が大層苦しんだ最後に、成程真に我れを惠んで下さる眞の親とも、眞の朋友とも云うべきは御佛である、あ実にありがたいと心がひらくて来ると、如何にも自分は悪い者である、邪推深いものである。もし仏陀のお恵みに気づかずには心まかせにしておいたならば、どんな乱暴な振舞にも出かねぬものであると、自分自身で懺悔した。自分の本性が解つて見て、中心から慚愧心が起つて来たところに、このように自分の悪性なことを知らして頂くのは實にありがたいと大いに喜んだ、これがいわゆる機法（きほう）の深信（じんしん）である。

さてこの信仰にどうしたら入れるかというに、昔からかくかく思うのであるとか、思わねばならぬとかと律法的におちいり、はなはだしきに至つては、信仰の最初の一念に限り二種の深信がある、第二念以後は法の深信ばかりであるとか、或は最初の一念は法の深信ばかりで、第二念以後

は機の深信が起るのだと、種々にやかましく云うと聞いて居ったが、私自身の信仰問題から云えば、この様な限つたことは云えぬ。ああありがたいという下に、悪い者なりという心があり、悪い者なりというところにああ有り難いという思いが必ずある。

四年以前に黒田君が信仰に入ったときには、これまで色々と理屈を考えて、仏があるとか無いとか云うて仏陀をないがしろにして居つたが、はからずも如來の御恵みに気づいてきて、もうたまらないで私のところへ出て来た。その様子は非常で、今思い出しても同情に堪えられぬ。その時「自分は實に謗法の大罪人である、今まで仏陀無限の大悲に気づかなかつた」と涙を流して懺悔せられた。又無漏田君が仏の恵みに気づかれた時は「ああ有り難い、私はこれでやるのだ」と大いに力んでやつて來た。

其後、両君が同じ日に信仰告白をした時は、黒田君は障子を開けて入つて来て、えらい勢で「建仁第三の暦春の頃（聖人二十九歳）隠遁の志にひかれて源空上人の吉水の禅

房に尋ねまいり給いき」私はこのあいだ九段の求道会の座で仏陀の大いなる恵みに気づかして頂いた。初めてこんなありがたいことに遇つた、如何なることがあっても、この喜びを世の人わかつことに一身を投するのだと、前に泣いた人が、此度は歎喜の余り感張り出した。これに反して無漏田君は、此度は私は永い間このありがたい聖教を捨てて、キリスト教に入つたりなどして仏陀にそむいたのはまさに申訳がないと泣きながらの懺悔であつた。あながちに泣いたが機の深信、喜んだが法の深信とも云えぬが、しかし暫く分けて、罪惡懺悔の心と、願力感謝の心と云うて見れば、この深信の二種の有様は、あとさきがないといふことはこれで分明である。まことに済まぬと思うしたに、ああ有り難いと云うている、實際は一つものである。

「聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんとおぼしめし立ちたまひける本願のかたじけなさよと御述懐そくらいしことを、今まで案するに善導の自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み常に流転して出離の縁あることなき身としれという金言にすこしも

と歎異抄に言うてある。仏陀の救濟を喜ぶのと、自己は罪と歎異抄に言うてある。仏陀の救濟を喜ぶのと、自己は罪

は機の深信が起るのだと、種々にやかましく云うと聞いて居つたが、私自身の信仰問題から云えば、この様な限つたことは云えぬ。ああありがたいという下に、悪い者なりという心があり、悪い者なりというところにああ有り難いという思いが必ずある。

至心即ち誠実である。ところが我々は誠実にせねばならぬと考えて誠実になろうとすればいよいよ誠実になることが出来ない。これを私の経験で云うて見ると、初めから自分は到底誠実になし能わぬと気づかぬ。そこで色々と試みてもどうしても誠実になれないが、人として誠実にせずともよい止めるべきではない。然るにこの様な不実の者に対して眞実にして下さるのが仏陀である。これが即ち至心である。この如來の眞実を知らずして、自ら眞実にしようとする故に大いに苦しんだのである。聖人は

一切群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして清淨の心無く、虚偽詔偽（てんぎ）にして眞実の心なし

と云われた。我等は遠い昔から誠実になろうとして能わない者である。これについて善導大師は、

外に賢善精進の相を現じ、内に虛偽を懷くを得ざれと云われたのを、若し律法主義に解すればとてもその通り實行は出来ぬ、實に内愚外賢である故に、聖人は外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虛偽を懷けばなり

と訓んで、我々は自性から惡である、偽である、如何にしても眞実至誠なること能わぬ者である。罪惡の塊りであつてみれば、賢善精進の相を現する勿れ。如何にしても中心

清淨の信樂無く法爾（ほううに）として眞実の信樂なし。ここをもつて無上の功德值遇し難く、最勝の淨信獲得し難し、一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常によく善心を汚がし、瞋憎の心常によく法財を焼く、急作（きゆうさ）急修して頭燃をはらうが如くすれどもすべて雜毒雜修の善と名づく、亦虛偽詔偽の行と名づく、眞実の業と名づけざるなり、この虛偽雜毒の善をもつて無量光明土に生れんと欲するこれ必ず不可なり。

と云うてある。我等はどれだけ立派に行が出来ても、貪愛瞋憎の心のためにおかされて、眞実の愛心が出て来ぬ。然らば如何にすべきかというに、信卷の次の文に、

如來苦惱の群生海を悲憐して無碍広大の淨心をもつて諸有海に廻施したまえり、是を利他眞実の信心と名づく。とある。その広大の如來清淨願心を廻施したまう有様は、次の欲生のところでよく味わわれる。

欲生といふは、どうかというに、我々は信仰を得たい、往生の心を起したいと思うても、此方から仏陀に向つて行く回向心は到底駄目である。私の経験でいうと、自分は他に対する眞実なることを得ざる故に、遂に互に疑い、互にへだてるに至つた。こんなことではいかぬ、此方から開いて行かねばならぬ、向かうから悪しくしても此方から善くすれば善くなるのである、何時までも互に争い合はしてはい

誠実に為し得ざるものである、しかも自己の不実偽善なることに中心より氣づく所以は、唯如來のみ眞実にてましますと頂けたからであつて、この時は我れ如き不実の者に対する至誠を垂れて下さるは唯仏陀のみと仰ぐばかりである。次は信樂である。即ち私の実験では、又どうか仏陀を信じたい、仏陀を愛したいと思うて一向そなれぬ。私が苦しみた時に、如何に他人を信じたいと思うても信ぜられぬ、自分が信じたいと思う心の裏面はたしかに人を疑つて居るのである。信じ得ないで疑つているのは他人に対する、誠実にすることが出来ないからである。如何に先方が悪くても我れは捨てず、向うに何事があつても我れはこれを疑わず愛するのが至誠眞実であるが、我れはことごとく人を疑いへだてて居つた。自分は到底眞実になり得ない者だけれど、どうか世の中に向かうから疑わずへだてぬものが無いであろうか、向かうが疑わずに愛してくれるものが無いだろうかとしきりに求めた。

最後に此方から求めるには及ばぬ、久しき以前から我れ如き悪しき者を真に恵みつあるのが大慈悲の仏陀であると解つて来た。即ち信樂は如來の我を愛したまう大慈大悲である。信卷には、

然るに無始より已來、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪（じょうりん）に沈没し、衆苦輪に繫縛せられて、

かぬものである、我より心を開いて他に譲ればよいとまで思うても、實際は譲られぬ、此方のものを他に向け、自分の心をひるがえして他に譲る廻向心は私には実は無いのであつた。信卷にこれを

然るに微塵界の有情（うじよう）煩惱海に流転し、生死海に漂没して眞実の廻向心なく、清淨の廻向心無し。と云うて置かれた。我々はまことにあさましいもので、他に對して眞実なること能わず、かえつて向うを疑いへだてる、此方からはどうしても心を開いてむかうことが出来ない。この様な者に對して仏陀は誠ならぬものに誠にして下され、疑う者を疑いたまわず、心を開いてむかわぬ者にどこまでも恵みをむけて下さる、これが大悲廻向であります。そもそも広大の慈悲の御親、南無阿弥陀仏それ自身が即ち眞実である、よって「至心は至徳の尊号を体とす」というてある。眞実は即ち大慈大悲である。よって「利他廻向の至心をもつて信樂の體とするなり」というのがこれである。いつまでも変らず飽くまで恵んで下さるのである、この様に如來の方から眞実慈悲をむけて下さるが廻向心である。故に「欲生といふは即ちこれ如來諸有の群生を招喚したり、誠にこれ大小、凡聖、定散自力の廻向に非ず、故に廻向と名づくるなり」と云われてある。

それであるから至心信樂欲生の三信は、三あるにあらずして唯一つである。例えは水の清きは至心、なみなみとたえてあるのは慈悲、即ち信樂である。この清くたたえた水をそぎかけて下さるが、大悲廻向とも欲生ともいう、

即ち招喚の勅命である、その広大なる仏心、南無阿弥陀仏をなみなみとそぎこんで下さるのが如來廻向である。この如き広大の信仰であるから相對的の言辭では何とも云う

ことが出来ぬ、善であるとか悪であるとか、頓に開けたとか、漸々に開けたとか云うことが出来ぬ、如何なる形容詞をもつてしてもこれを表わすことが出来ぬ。よりて信卷に

凡そ大信海を按（あん）すれば、貴賤、縉素（しそ）をえらばず男女、老少をいわず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず。行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず、多念に非ず、無念に非ず、尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念に非ず、唯これ不可思議不可説の信樂なり。たとえばアカダ薬の能く一切の毒を滅するが如し、如來誓願の薬の能く、智愚の毒を滅するなり。

と歎美してある。大水の来り満たすが如くであるから、ただもう絶対不可思議の信樂である。大悲廻向の信樂である、横超（おうちよう）他力の信樂である。終に臨んで特つて諸君の注意を乞うことは、清き水をなみなみと我

胸の中に注ぎこんで下さるという点、これ即ち大悲廻向の信心であつて、即ち開巻に述べたる如く真宗の眼目である。

## 法華經 寿量品の偈

衆生を度（わた）さんためにとて

方便して、涅槃を示せども

しかもまことに滅度せず

常にここに住して法を説く。

衆生すでに信じまつろい

質直（すなを）にして、こころやわらかに

一心に仏を見たてまつらんと欲して

自ら身命をも惜しまざらん。

時に、我及び衆僧

俱に靈鷲の山に出でなん。

## 求道の中 心

### 福島政雄

近角先生は父、臼杵先生は母

とにかくそういうことであつて、親鸞聖人から、あちらからも、こちらからも、いろいろなみ教えをいただいて、それで私というものが、どうやらこうやらもう七十年を越

えたこの人生の行路を歩んで来ている。決してつまずきのない歩みでないであつて、むしろこのつまずきだらけといふ方が本当なのである。けれども、つまずきたらけのこの自分というものを、あくまでも見捨てないというところの本願の響きが私の胸にふかく伝わつてくる。そして私というものは、細々ながらお念佛のうちに、この五十何年を生きさせられているということだけは事実である。

ただ初めに述べたとおり、近角先生のような非常な熱のある信念でこの道を説くといふことができなくて、いかにもなまぬるい人間である。自分ががらそう思うのである。近角先生が今はお淨土から

「あいかわらずなまぬるくやつておるな、しかしまあ、お念佛は申しているらしい」

というようごらんになっているかと思う。そしてこの

近角先生は、私にとつては信仰の道のお父さまのような感じがするのである。

それからまた臼杵祖山先生の方は、お母さまのような感じがしているのである。というのは、近角先生からはだいぶんお叱りを受けている。ところが臼杵先生に対しても私は根かぎり甘えたものである。先生は大分県の中津においてになつた。

実は、臼杵先生は、お若い時にはなかなかお強い人で、法隆寺で何年間かご修行になる間、そば粉だけで生命をつないでおいでになつた時代がある。先生から直々に伺つたことであるが、時々そば粉を湯でねる暇もなく、それを生（なま）のまま口に入れられた。その頃、一升が三、四十錢くらいであったそば粉を食べて、法隆寺の修行をつづけたとおっしゃつていた。法隆寺の他の弟子さんに聞くと、臼杵先生は特別の体です、よくそば粉ばかりで栄養がもつたものだという方もあった。しかしそば粉ばかりでは

なく、時々野菜を入れ、お味噌を混せたりなさつたといふことも聞いた。そういう風にして生活をつめて法隆寺で何年間かご修行になつた。

そのころ法隆寺で子供の頃から修行する人々には、臼杵先生はお母さんのように思われていたそうである。というのは他の弟子は子供に柿を与えるとするとき、柿の実をそのまま与える。臼杵先生はていねいに皮をむいてやつてそしてその子供を待つておられる。本当に臼杵先生はお母さんのようにだつたと他の弟子さんもその感想を物語られたことがある。やっぱり若い時からお母さんの一面をもつていられたのである。そこに私がつけこんで、さんざん甘えたものである。私はもともと母から大事に育てられた、というの私は生れる一月前に、四つになる兄が急に死んでいるので、私が生れたのだから今度は死なさないようになると、非常にかわいがつて育てられたものである。だからどうも私は甘え子で、この年になつても甘え子のくせはぬけない。それから臼杵先生を発見したのは、よいお母さま、信仰の母を見たのであって非常に甘えた。

中津のお宅へお伺いしても、仏法のお話をみじんも聞かないで、ご馳走をいただいて、お酒をいただいて、私はいかげんな謡曲を先生の前でうなつてみたりして、それから先生のお伴をして、名月の晩に、稻の実つている側に椅

公開講演のお話で、四十華嚴の善財童子の訪問する国々で甘露火王の國を訪れる、そのお話をなさつた。

甘露火王の國というのは、これは日本の言葉でいえば万世一系で、国王は歴代血筋が続いて、長子相続ということになっている。そしてその国民といふものは心を一つにして、王さまの方は、その国民と一緒に、国民は王様と一緒になつてゐるというような、なんとも云えぬよい國で王はかような徳をそなえているというのであるが、この甘露火王の國こそ、仏教經典に出ている理想の國である。ところがこれを読んでみると、この世界中で日本の國が一番近いではないかと思う。神武天皇が日本の國をおはじめになり、そして聖德太子が仏教を本統の意味において日本の國においれになつた。そしてその日本國といふものは、甘露火王の國に似ている。そうであるから、仏教の理想の國が表現されたとしたならば、この日本の國より他にはないというような意味のことを非常な熱をもつてお話をなられた。これが私につよく響いたのであつた。

私が華嚴經の善財童子の求道物語を読むようになつたのは、佐々木月樵先生からこれを聞いたのが刺激になつて読みはじめて、後に臼杵先生の教えによつて、四十華嚴のそらを読むことになつた。そして先生は私の心を非常に導いて下さつた。それで近角先生、臼杵先生を信仰上のお父さ

子をならべて月を見る。結局仏法のお話はちつとも聞かずには甘えどおしてお別れをするというようなことをよくやつたものである。

私が五十一歳の時にチバスになり、広島の伝染病院に二ヶ月入院していた。その時いろんな方からお見舞を頂いたが、私の家内がいうには臼杵先生が一ぱん暖い心でお見舞下さったように自分は感すると云つていて。もちろん法隆寺の佐伯定胤師、近角先生、大学の倫理の主任教授西先生なんかは、今日はもう家内が行くなど云うけれども、心配でたまらんからまた見舞にやつてきたと伝染病室において下さつて、レモンを下さつたこともあったが、そういうことも暖い深いお見舞であったが、臼杵先生の御見舞が一番暖いように、お母さんのように感すると家内もいつていて。そういう風に私に信仰の導きをいただいたお母さんであつた。

### 理想の国土

先生のお話なり、お書きになつたものは深く私の耳の底に残つており、長者窮子の譬えの話も、その一つである。臼杵先生はかねてお話をなさる時に、しづかに落着いて、聞いている連中は大分ねむつてゐるけれども、そんなことは氣もつかないという風でじゅんじゅんとしてしづかにお話をすすめられたものである。ところが、ある時、広島でま、お母さまというような気持で遇してきた。

近角先生は十六年にお亡くなりになり、臼杵先生は二十二年であつた。お二方ともお淨土の方である。この世は非常に淋しいけれども、私はお二方によつて導きをうけた。もちろんそのほかの方々にも、いろいろなお導きをうけたが、このお二方はとりわけ父母の感じが深い。そして親鸞聖人のみ教えに私をだんだんと導いて下さつて、私の日常生活の態度の上にそれがどれだけ立派にあらわれているかということをお尋ねをうけると、立派にあらわれているとは決して申しあげられないけれども、そのお導きによつて、どうやら私が人生の行路をたどり、つまずきながらもたどつてきている。そういう次第である。



# 念佛は時と処を超えしめる

松本解雄

農繁期にかわらず多数お集り下さって池山先生の三十七回忌を、かつて先生が二度も御講話して下さった異閣（岡崎市公園内）でいとなませて頂けますことを、先生もさぞお喜びと思います。

私は昭和四年四月、先生が甲南高等学校から大谷大学に招聘せられて、京都に移り住まれてからお教えをうけてまいりました。初めてお会いしたのは、京都市寺町二条のさやかな喫茶店、鍵屋の二階に、京都学生親鸞会の有志数名と先生をお招きした時で、夕景近く奥様同伴で来られました。

私と花田さんとの面会は不思議と申すほもありません。花田さんは岡山の医大の三年で転じて京大文学部の仏教学に来られましたが、私は青森県生れで、親戚から学資を貰って、東大の宗教学をやる予定が変って、京大の法學部で三年学びました。世間に出てもつぶしがきくと思って入り、滝川教授に第一講義をうけましたが、どうも性格に会わぬと申しますか、落着けぬまま、卒業して哲学に転じちと思います。

私は青森生れのズウズウ弁ですから、人様の前で話をすることは出来ません、東北弁で軽蔑されたので語ることが出来ませんでした。ところが京大仏青に入つて眞実の仏教を求めていたのでその会の幹事をして、各方面的講師を迎えて例会を催しました。ポスターを書いて校内に掲げていましたら、花田さんが見つけて話しかけられたのがきっかけになりました。

未知の人、曲り道をした二人が、昭和三年の春めぐり会いました、当時は花田さんは京都府下八幡在の横田慶哉先生の寺から通学していられたので、その年の十月の報恩講に参詣し、御縁が熟して念佛が申せる身になりました。親鸞聖人は二十九歳の時、法然上人にお会いになつて、たちどころに他力摂生の旨趣を受得せられ、信心開発の一念の端的を体験されましたが、そのことはもとより大事であります、が、それまでに幼時に父母を亡くされ、九歳の時、慈鎮和尚について出家、平安末期の動乱の時代、老少不定の無常の嵐にさらされて、本当の仏教を求められました。そして二十年、最後には常行三昧堂で堂僧となつて念佛を行ぜられましたが、十八頃の他力廻向の念佛に帰せられました。それまでの幾星霜かの間の種々の御縁がなければ、お念佛

仏数学に入りました。そこで青森の私と岡山の花田さん、全く没交渉で、赤の他人であり、当時哲学の学生は二百人程あって、話し合う機会もなかつたのであります。それなのに出会えたのは次のようなことからでした。

私は真宗の寺の出身ですが、兄弟が七人もあつたので寺を継ぐ必要はなかつたのですが、今から考へると勿体ないことながら、私は寺に生まれたことを悲しく思いました。お念佛は形式的に朝夕に仏前で称えました。父は熱心に布教もしたので一緒に行つてよく聞きました。然し肝心のお念佛は形式的にいたしました。ところが私の十五の秋、父が中耳炎になりましたが、田舎のことで専門の医師がないので、そのうちに脳膜炎をおこして一週間目に七転八倒の末、四十七歳で死にました。兄弟も多かつたけれど、私は父に十歳頃までよく可愛がられました。

父の死後にごたごたがあつて、丹羽文雄さんのような文筆があれば大きな小説が書けると思います、これはどうすることも出来ぬ宿業をもつていきました、皆様も夫々にお持

の信心の花が開けなかつたのです。全く、たまたま行信を獲は遠く宿縁をよろこべ、とある通りであります。

さて、池山先生にはさきほど申しましたように昭和四年春の頃お目にかかり、直接お教えをうけました。その時、先生は、お念佛が自然に出てくる、信界流出の念佛をそのまま徹底して、信界から自然に出てくるお姿に接しました。先生の御講話には必ず一度や二度、たた念佛して、とある歎異抄二章の言葉が出ていました。今日も私は、講題を「ただ念佛して」と出しておきましたが、あとから思いなおして、「念佛は時と処を超えしめる」と改題させて貰いました。

これにはいきさつがあります。私は先年愛媛大学を定年退職し、松山から高松の短期女子大学につとめるようになつてから高松に移り住んでおりますが、松山も広島の安芸門徒の影響をうけて同行もありますが、御縁がうすいようです。高松は、讃岐に庄松同行も出た地で、今日も仏法が繁昌しております。庄松は百年ほど前に三本松に生れましたが、こういう土地柄もあって坂出に鎌田晃さんという方がおりました。この方は立派な方で現代の妙好人と申されている人です。鎌田さんは酒の醸造家に生れ、素封家でありまして、第一高等学校から東大法學部を出た人ですが、篤信な方で、明治、大正頃の有名な信仰者に接していられ

ました。

その鎌田さんが、池山先生に親しくするというより、善知識と仰いで先生の提撕をうけておられました。その方が池山先生が病気が段々あつくなつた頃、病床を見舞われますと、御見舞の客もあつたのにそのなかを、特に鎌田さんを近くにまねかれて

「お念佛が苦しくて称えられないでいたがお蔭で今日は称えさせて貰つた。念佛は時と処とを超えているね」と仰言つた由であります。池山先生が亡くなられた時の挽歌に、鎌田さんの次のようないがあります。

苦しみのなかより今日は 南無仏と 称えられきと

師はのたまえり

枕頭（まくらべ）を かこめる医師の 数々を 押し開  
きてぞ われを呼ばれける  
百苦身に せまりつる師の ほほえみは これぞ六種の  
震動なるらん  
わが恩師 逝かれしときに 不思議にも 生きてましま  
すことを知らざる  
幾百の 人の死にめに 会いつれど かかる不思議の  
ためしなかりき  
朝夕に 顔をあわせて 過ごすとも 別れつつある 人  
もありけり

身は遠く 海山へだて 暮せども 日に日に会いて 過

ごす人あり

信仰は 時と処を 超えさする 尊きおしえ 師に知らされき  
聖人と 七百年を へだつれど 会われうるぞと 師はのたまへり

うからやから 日に日に共に 暮せども わかれわかれ  
の の 暮しなるらん

比叡の山 七百とせの むかしより 念佛の風の 吹く  
ぞ尊き  
百年を 七たび重ね 来ぬれども 祖師聖人に 会うぞ  
うれしき

○

最近に出ていた『妙好人余瀝』を京都で見つけ、その中に鎌田さんのことが出ていますので紹介いたします。  
鎌田さんの仲良しの友達でお医者さんがあつたが、念佛ぎらいであつた、しかし酒好きの医師であつた。鎌田さんはこの友達をどうかして念佛の世界に引き入れたかつた。そこで「酒ばかり飲んでいたのは駄目だ、医師として病人を丈夫にすることも大切だが、それよりも生き方が大切だ。西洋ではソクラテスも、ガリレオガリレイは科学者が宗教的な立場を得ている。君も宗教にすこしは耳を傾

けよ」と勧めたけれど、「お前は酒屋だからそんなことを云つておれるが、医者が念佛していたら患者が来ないよ。まつ平だ!」と云うて拒否していた。

然し二人は仲が良かつた。ところが平素元気だった医師が急にバッタリ倒れて大病になり、それから段々おとろえて、医師として自分の重態を知つた。

その時鎌田さんが見舞つて「親鸞におきてはただ念佛して」と池山先生が書かれた掛軸をもつて病床に行つた。すると、「沢山のお見舞がきたが、鎌田だけがこの軸をもつて來てくれた」と云つて、今までと考へがちがつてきた。そしてこの軸を眺めながら、「ただ念佛して」のただといふことがわからぬと医師が奥さんに云うようになつて聞法の縁が大分熟してきて、そこを一つきかして貰いたいと、奥さんから鎌田さんに報せがあつた。

鎌田さんは謙遜な方で、丸龜の脇観道師（現在九十歳）を招いて、伴に病床を見舞われた。医師は非常によろこんで、御法を真剣にお聞きしようとなつた。今までには「鎌田はよい友達だが、僕に酒をやめよとは無理だ。陰気な念佛をするが、……」という状態だったのがすっかり変つて、「鎌田は親切だ」といいはじめた。

そこで脇師と一緒に病床を見舞い、脇師がおもむろに口を開いて、

「あなたが鎌田さんの親切がわかつて感謝の心がおこつて、ありがとうという言葉一つを聞いて、あなたは仏様に近づいていられることがわかりました。  
その鎌田さんよりもっともつと親切な仏様をそでにして逃げて／＼おりました。それを仏様はお見捨てなく、南無阿弥陀仏とあらわれて下さつたので、あなたの過去をとがめず、そのまであなたを救わんとの一念が南無阿弥陀仏と申せと仰言つて下さるのです。私共がまいろうとしてまいられる淨土でなく、ただかなならずまいらせねばおかぬ、間違わきぬの仏の念佛をハイとおうけするばかりです。人間の持つ小智は駄目で、恰も太陽の前の電燈のようです。古歌にも

はからいてはからいぬいて疲れはて弥陀のまことにはからわれ行く  
と頭がさがる外はありません。あなたの称える念佛の力でなく、本願力で称えさして下さるお念佛ですぞ！」

「ありがたいのう。鎌田、仏ぎらいのわしが、南無阿弥陀仏々々々

と医師が鎌田さんに述べられると  
「君の方が、もっと仏様に近い、君は仏様の子にして頂いた云々」

と、鎌田さんがわがことのないように喜び、又医師の夜明けした心から念佛し、数珠を手にした姿は、きよらかな光景で

「本当にそうだったか、ありがたいのう」

とよろこび、奥様もその不思議な光景に涙を流して友情を謝すばかりであった。

その鎌田さんが尊敬してやまなかつた池山先生は、六高や甲南高校、谷大でドイツ語を教えられたながら、念佛は円満な人格と伴つて学生に大きな感化を与えた人であります。鎌田さんはお念佛でお見舞されたのが千万言の慰めの言葉よりもありがたく受けとられたのであります。その池山先生が、念佛は時も處も超えますね！と、つぶやくが如く、或はさとすがごとく仰言つたのは、本願名号をそのままに、聖人と同じお念佛の姿であったのです。

みさとしをいまわのきわにたれたまう ふかきえにしになみだこぼる

と鎌田さんも述べられましたが、今日先生の三十七回忌に際し、時と處をへだてておりますけれど超えて心につたわって参ります。私もこのみ教えをこの世に身の及ぶかぎり力のおよぶかぎり共々によろこび伝えて行き、先生に対する報謝としたいと存じます。

昭和四十九年六月三十日録音す。

二 人 の 我

柳瀬留治

老いぬれど老の実感我になく心の青く済たれのまま

老といはれ齡數ふに宣へど知的客觀にして実感に遠き

鏡に見る八十一の我的つら髪粧白く皺の深しよ

老いたりと見る他なる我と実感のイメージの我と二人胸に棲む

我は老ぞ老ぞと日日に聞かすれど老と思へずかくて死ぬべし

美と若き命となせる四十をみな化粧に敢へて皺かくすらし

積る老かくし敢へずしなれる時いかに女は淋しからなむ

窓口の若き局員らいふ聞けば曾て老ゆとは思はざりといふ四十過ぎて齡かたぶく折しもよ老いなむ我と思ふなるべし

(昭和四十八年四月、短歌草原誌)

## 松 本 解 雄 教 授 を弔 す

花 田 正 夫

二月十六日、榎原師からの電話で松本様の急逝を聞き驚くというより夢としか思えませんでした。次いで琴平の高塩さんから電話で、教子の結婚式で神戸に招かれ、式場で突然転倒、そのまま不帰の人となられた由。更に十八日に再び電話で十九日午後一時から高松市近在の御自宅で葬儀、千葉崇憲師が導師せられる等々の詳報をうけ、いよいよ夢ではなく、悲しいきびしい現実だったと納得させられました。今日十九日朝、はるかに告別式の近い時、ありし日を偲びながらペンを走らせております。

松本様は青森県出身弘前高校を出て京大法学校を卒業せられましたが、法学が性格的に満足出来ないで、再び京大文学部哲学科に入學して仏教学を専攻されました。年齢は明治三十七年生れで私と同年、しかも京大で同窓、岡山の医大から哲学に転じた脱線男の私を、京大で一番早く理解して下さった人であります。その人柄は私共の担任教授の羽溪了諦先生が、『仏灯をかかげる』という松本様の著書の序文で次の様に述べていられます。

「松本教授は京大文学部に在学中、わたくしの司宰していた知四明寮で三年間寝食をともにした親しい間柄であります。その資性は文字通り温厚篤実で、しかも真摯な求道心に燃え、京大学生を中心として結成された親鸞会に参加して、ひたすら親鸞聖人の正信念仏を体解することに精進された結果、遂に無碍の一歩を歩む熱誠な念佛者となられたのであります。」

松本様の温厚篤実で真摯な求道者であつたことが知四明寮の皆様、向島、川畠、田村、西元、長谷、加田岡、宮地等々の諸兄を動かして、やがて京都学生親鸞会を結んで、谷大、竜大、三高、京都女專等々の有志の参加を得て月々会合し、次いで聖鸞寮で共同生活をしながら聞法の道にいそんだことも感銘深い日々であります。

私は卒業後、大連に一年、次いで名古屋に移りましたが、松本様は、浪速商業に数年勤め、次に松山の学校から終戦後に愛媛大学の教授、定年で退職後は高松女子短大に招かれ今日にいたりました。信念を生命とされて教育の道に

精進して下さり、一昨年は叙勲をうけられました。

思えば四十六年間、同一念佛の道を共に歩ませて頂き、池山先生、羽溪先生、そして横田先生等々と師を同じくして、親身にまさる信交を結ばせて頂き、秋の池山先生の一

道会には淨住寺でお会いして、其年々々の信味を頗って頂いていましたのに、もうお目にかかることが出来なくなりました。人生の寂寥さを今更にひしひしと覚えます。

池山先生が、ペルから見舞に帰られた寿夫様を再び送り出された時に、

逢うてまた別る日なり今日よりは

またの逢う日のめぐりをめける

と詠じられた御心を思うかべておあります。お一人ともこの世での再会は期し難く、いずれ今度逢う時は、別のところだと、淨土での俱会一処の再会をしのばれての歌であります。又私の心にうかびますのは『唯信鈔』の今生ゆめのうちのちぎりをして、来世さとりのまえの縁をむすばんとなり。われおくれなば人にみちびかれ、われさきだたば人をみちびかん。生々に善友となりて、たがいに仏道を修せしめん、世々に知識としてともに迷執をたたん。

松本様の講話は、昨年六月三十日に、岡崎市公園内の異閣で、池山先生の三十七回忌の記念講演会でお話し下さいました。この元氣で、身のかぎり、力のかぎりこのみ教えをこの世に伝えのこしたいと仰言ったお念願は、今や淨土に還られて、「仏となりて思うがごとく衆生を利益」して下さるお姿と転じられました。末ながら照覽と加護をたまわらんことをお願い申します。

### 追記

松本様の講話は、昨年六月三十日に、岡崎市公園内の異閣で、池山先生の三十七回忌の記念講演会でお話し下さいました。この元氣で、身のかぎりこのみ教えをこの世に伝えのこしたいと仰言ったお念願は、今や淨土に還られて、「仏となりて思うがごとく衆生を利益」して下さるお姿と転じられました。末ながら照覽と加護をたまわらんことをお願い申します。

昭和五十年二月十九日稿す



## 西 方 の 淨 土

### 山 本 晋 道

#### 第一 淨 土 の 実 在

淨土は果たして実在するものであろうか、実在するとして、どうしたらそれが信じられるであろうか、このことを考えるには「淨土」ということと、「実在」ということと「信する」ということの三つを考えなければならない。

一口に淨土と言うけれども、色々の考え方がある。第一は一法句（いちぽつく）の淨土である。これは無相無辺の淨土であって、仏のみよく知りたもう境界である。

次は、十方仏国を淨土とみるのであって、これは有相無辺の淨土である。これは菩薩の地位（平等の智慧）に至つて観念するとき初めて知ることの出来るものであって、我々の如く、煩惱具足、散乱放逸の凡夫では分りようのない淨土である。

第三は、有相有辺の淨土で即ち西方弥陀の淨土である。これは久遠劫來、流转せる苦惱の旧里は捨て難く、最後ま

で安養の淨土の恋しからぬ我々如き者をことに憐んで救いとげんがために弥陀如来によつて建立され与えられてあるものである。

以上三つあると言つたが、それは淨土に三種類あるといふことではない。ただ一つの救いの世界である淨土が、認識する者の立場によつて三通りに説かれてるので、この三つの淨土は同一のものありかたの三面である。従つて西方の淨土に往生するまんますが、一法句の淨土に生まれることであり、十方の淨土に生まれることである。丁度同一の水が、熱すれば氣体の水蒸気となり、さめれば液体の水となり、冷やせば固体の氷となるが、しかも水素二つ酸素一つからなる水の本質に何等の変りがないように、仏の智見の対象も、菩薩の観見の対象も、凡夫の往生の対象も同じ悟りの世界であることは無論である。

そこで今、煩惱具足の散乱放逸の凡夫である我々が、此處に問題としている淨土とは、この西方の淨土であることをはっきりしておかねばならぬ。このことは極めて大切な

ことである。自分の身の程を忘れた議論は何の役にも立たぬからである。盲人が、自分の盲人であることを忘れて、

太陽は実在するかと、いくら議論しても何の役にも立たぬからである。盲人が否定しても、肯定しても、夢中の論議で、太陽の存在とは何の関係もない。

我等が淨土の実在を考えるときも同じである。我々相対流転の世界に囚われている者には、絶対は絶対のままでは認識されようがない。そもそも形もない法身の仏、無相無辺の淨土という絶対の消息になると、私共の頭に入り切らぬのである。これはそのままでは我々にとっては認識の出来ない境界である。そこでこの絶対が相対有限の世界に現われて、相対有限の形になつてそれ自らを顕現して来るのが西方の淨土である。そこでも日月も星も西に帰し、夕暮になると風間の雜音も静かになる西方と方角を示し、十萬億の仏土を過ぎて淨土ありと示されてある所に深い意味があることを知らねばならぬ。

我々が亂想の凡夫であることを忘れて、仏のみよくしろしめす一法句の淨土を素手でつかもうとしたり、煩惱を解脱した菩薩の観智によつてのみ知られる十方淨土を認識しようとすることは、観念の遊戯としては興味があつても、決して生きた宗教体験として、実人生の光となり力となる救いは見出せない。淨土をかたる時、私は何時も、

加えておく。

## (2) 実 在

次に「実在」ということはどんなことを考えねばならぬ。仏教では「存在する」と言うことは「成就する」ということである。「ある」ということは「なる」ということである。地獄があるということは、地獄になるということである。麦の種をまいて水、肥料、日光とこれが実を結ぶ縁を与えると、この種は色々の縁によつてきっと実となる。仏教はこの因縁果の法則の上に立つ。この世に奇蹟といふものは決してない。奇蹟とか偶然とかいうのは、たまたま結果は生じたが、その因と縁とを明らかに見届けることが出来ない場合にそうよんでいるに過ぎない。仏教が眞実の法といわれるのもこの真理の上に立つからである。自分が作つた地獄に自分が墮ちるのである。

だから地獄の有無は、自分を取りおとして考えてわかるものでない。仏の智慧光に照破されて、過去から今日までの自己のあさましくおそろしい生き方を、そのままに知らせしめられるがよい。そこに畜生道の因である愚痴の闇があり、餓鬼道の因である貪欲の波浪があり、地獄道の因で

世俗の君子幸臨し 勅して淨土のゆえをとう

十方仏国淨土なり 何によりてか西にある

鸞師こたえてのたまわくわが身は智慧あさくして

いまだ地位にいらざれば念力ひとしくおよばれず

の親鸞聖人の雲鸞大師の和讃を思い出す。淨土論註の著者として、淨土について、天親菩薩と共に、古今独歩の經釈をせられた大師にして、なお「いまだ地位ににいらず、智慧浅短なり」(地位とは菩薩のくらい) とすかに謙虚に西方を合掌していられるのである。このように自己の能力について徹底的な反省を有する謙虚な人の前に、初めて西方の淨土ははつきりと現われて来るのである。十方の淨土などとはとても念力のおよばぬ乱想の凡夫であると、悲泣し慚愧される大師が、人類の史上で最も鮮明に淨土を渴仰して、我等に灯炬を掲げて下さったのである。

(私註) 更に聖人は讃阿弥陀仏和讃に

弥陀の淨土に帰しなればすなわち諸仏に帰するなり  
一心をもちて一仏をほむるは無碍人をほむるなり  
と、西方淨土に帰することが十方淨土と一法句の淨土に帰することと讃仰され、又愚痴の女人韋提夫人に

恩徳広大釈迦如來 韋提夫人に勅してぞ

光台現國のそのなかに、安樂世界をえらばしむ

と、觀經和讃で釈尊の深い思召しを讃えられていることも

ある瞋恚の火焰がある。この因をはつきり信知する時、地獄の存在を信知することが出来る。これが信心の智慧のはたらきで、學問の知識で議論してわかる問題でない。

我々は生まれる前も、死んで後のことを探る力をない。従つて前世どこからきたのか、死んでどこへ行くのやら、そんなことの分る筈がない。我々に分ることは今世だけである。それも今現に此處にこうしている自分のことだけである。ただ、ここにこうして居る自分は、忽然として偶然にあるのではなくて、過去の私の生み出した必然の結果としてある。だから、この現前の私の実相を、仏に知られてゐるのではなくて、過去の私の生み出した必然の原因としてあるのであり、未來の私を生み出す必然の原因としてここにあるのである。だから、この現前の私の実相を、仏智を頼いて信知するとき、過去の私を推知することが出来、未來の私を予断することが出来る、春まいた種の量によつてほぼ秋の穫りの量を予想することが出来るようにな。

これを一言でいえば、我々は現在の果によつて過去の因を推知し、現在の果、即ち未來にとつての因によつて未來の果を予断することが出来る。約言すれば、地獄の因があるから地獄におちるのである。同様に、往生の因があると往生の果を予断出来る。そこで、淨土があるといふことは、淨土になるということである。淨土になるとは、私の中に往生淨土の因があり、縁がそなわつてゐるということである。因と縁のないところに果のありようがない。そこ

で淨土は実在するやといふ疑いを解く唯一の鍵は、汝は往生淨土の因を持つてゐるか否かである。

往生淨土の因は南無阿弥陀仏である。本願の名号は正定の業である。これは淨土の仏が、その修せられた善根功德の一切をこの御名に成就して、これを私に廻施して下さつて、私を往生せしめようとしたもう所の、円融至徳の嘉号である。これを信受する者は彼の仏の国土に生まれる。この功德の御名を内に頂いたのが信心であり、その信心が私を通じて流出して、口に称名念佛、身に礼拝合掌となる。

この信心が往生の因であり、この信心発起の一念に、如來の光明は私を攝取して捨てたまわらず、墮獄の因の罪業の一切は、仏の光明によつて転悪成徳される、この光明が往生の縁である、内に信心の因をめぐみ、外に光明の縁を与えて私を往生成仏せしめたまう。これが他力の救済である。この信心の因を頂いて、初めて地獄の存在も分り、淨土の存在を体認することが出来る。蓋し信心とは仏智であつて、内に二種の深信を具する。一つは地獄必定の我であり、一つは往生必定の我である。だから、淨土や地獄の実在は自己を取り落して議論すべき問題でない。嚴肅なる態度で如來の光明にはぐくまれて、その作願のお目當となつた恐ろしい自己の如実相を見出すことである。自己の内地獄の因を内観せしめられた人にして始めて地獄が問題と

て、私を往生せしめようとしたもう所の、円融至徳の嘉号である。これを信受する者は彼の仏の国土に生まれる。この功德の御名を内に頂いたのが信心であり、その信心が私を通じて流出して、口に称名念佛、身に礼拝合掌となる。

この信心が往生の因であり、この信心発起の一念に、如來の光明は私を攝取して捨てたまわらず、墮獄の因の罪業の一切は、仏の光明によつて転悪成徳される、この光明が往生の縁である、内に信心の因をめぐみ、外に光明の縁を与えて私を往生成仏せしめたまう。これが他力の救済である。この信心の因を頂いて、初めて地獄の存在も分り、淨土の存在を体認することが出来る。蓋し信心とは仏智であつて、内に二種の深信を具する。一つは地獄必定の我であり、一つは往生必定の我である。だから、淨土や地獄の実在は自己を取り落して議論すべき問題でない。嚴肅なる態度で如來の光明にはぐくまれて、その作願のお目當となつた恐ろしい自己の如実相を見出すことである。自己の内地獄の因を内観せしめられた人にして始めて地獄が問題と

る私共の、力となり、光となつてやろうと、たもちやすくなえやすい名号を案じ出だしたもので、我が名を称えんものを助けんと誓いたものである。この御名をほれぼれと称えられる人にはやくなることが大切である。はからいなく、わざらないまことの念佛は、唯信海のみから流出する。この信念が一度開けると、雨につけ、風につけ、南無阿弥陀仏と自然に念佛が流出して下さる。

この信心決定の身になることだけが、淨土の実在を感知出来るたつた一つの道である。それが逆に、淨土の実在を証明して、それから信心しようとするのは本末顛倒の妄見である。乱想の凡夫の身で直接淨土の有無を論じてはならないことである。

元來、仏は信すべきものであり、淨土は願うべきものである。仏の実在を確めてから信ずるのでなく、信心に於て仏が知れるのである。もつとつきつめて言つたら、信となつて仏は我等の内にも現われたまうのである。信仰の対象である仏は、外にあって拝まれるまま、拝まずに居られぬ心、信心となつて内にも来たりたまうので、この信におい初めて如來に遇うのである。

この信は聞によつてのみ生ずる。祖師聖人がこれを「聞」といは衆生仏願の生起本末を聞いて疑心あることなきを「聞」と示されている。謙恭に名号を聞き、念佛する信心の人となることなしに仏の実在を論じても空しい。

なり、自己の内に与えられた往生の因を信知して、始めて淨土の実在の問題が解決する。因を見るとなしに、徒らに果を論ずるのは、肯定しても、否定しても、結局空理空論にすぎぬであろう。

### (3) 信すべきは仏

以上淨土の実在をどうして信じるかを説明したが、この信心も如來からたまわったものでなくては断じて往生の道はなく、往生の因である信心を頂かずには往生すべき淨土を論ずる立場もない。

だから仏の大悲を聞信しないで、直接に淨土を論じても解決しない。お淨土は直接私共の手ではつかめない、凡夫の身にとつては非境である。ただ智慧の名号を頂いて信心の智慧が開けて、即ち「淨土に必ず参らせるぞ」の如來のお慈悲を聞いて安心するときに、初めて参らせて下さる御國の有難さもほのかに分りをめてくる。だから、私共はお淨土に直接に向かつて安心しようとせずに、仏の大慈悲心を聞き、名号を頂いて安心するのである。

如來さまのお慈悲のありつたけは、名号に打ちこまれている。名号は我をよぶ生きた如來の声である。名号において如來はあらわれていて下さる。この名号をおいて私共にわかる仏はましまさぬ。

仏もわからず、淨土も見えず、迷いぬき苦しみぬいていただからである。

### (4) 方向転換

要するに、淨土の実在問題は、淨土それ自身を直接問題とせずに、信心を頂くことが先決問題である。盲人が直接に太陽の存否を問題とせずに、有眼の人の言葉で太陽ありと聞いたら、その太陽を仰ぎ得る眼を開く工夫をすることである。

眼は光によつて開かれる。深海の魚には眼がないときが発生する。謙虚に聞きまつる時、智慧光のおそだてに浴する事が信心の眼の開けるただ一つの道である。ここにはじめて一切の謎が、内からなるほどなど、解けるときが来るであろう。

聞法一路！この外に手はない聞名の宗教が淨土真宗である。

## 浄土の勧め

道綽 禅師

大乗の教によれば、仏の覚りを開く道に二つある。飽くまでも智慧をみがいて眞実を見きわめ、これを身につけて迷いを離れようという聖者の道と、我身の無力を痛感し、ひたすら仏の大慈悲をうけて、その淨土に生れようとする凡夫の往生の道との二つである。しかし、聖者の道は今の我々には実行することが甚だむつかしい。そのわけは、大聖釈尊とはるかに時代をへだてて、その教法の影はうすら、ぎ、人格の感化から遠ざかっているし、更に、聖者の求める真理は深いけれども、それを理解する我等の能力はとぼしいからである。

大集月藏經によれば、釈尊は「わが死を去ること遠き末の世に生れた人々は、修行して仏法を求めて、恐らく一人も真のさとりを得る者はなかろう」と仰言っている。現在がその時代で、濁り汚れた末世であるから、我等が救われ得る道は、唯一つ淨土往生の教より外にはない。大經には「たとい一生涯の間、惡を造り罪を重ねた者でも、いまのきわに十声でも我が名を称えた者は必ず淨土へ生れしめよう、それが出来ねば私は仏にはなりませぬ」との本願を説かれている。

だから今の人々は皆しづかに自己の力量を省みなければ

ならぬ。大乗の教えに説く眞如とか、実相とか、第一義空とかいう理を心においておいたことさえあるだろうか。又小乗の教えに説かれる惑いを断ち、迷いを去る修行に堪えうる力を持つているだろうか。それどころか、再び人間や天界へ生れるためには、五戒や十善を守らねばならぬが、これの出来る人さえ極めてまれである。現に我等の惡をなし、罪を造っていることは、あたかも暴風駆雨（しう）の荒れ狂うようではないか。この様な我等がどうして聖者の道を辿ることが出来ようか。そこに仏は我等をいつくしみあわれみ給うて、勧めて淨土を願わしめて下さるのである。たとい生涯惡を造り続ける我等も、ただ専ら心をかけて念佛すれば、なにものにも障えられず、必ず淨土へ生れることが出来る。人々よ、よく自分の力量を考えて、我等のために開かれた淨土の道に進み、念佛成仏させていただこうではないか。

（意訳）安樂集、上巻末。



## 念佛詩抄

### 木村無相

#### 後生の大事

後生の大事  
心配無用  
お助けさまが  
お引きうけ  
お助けさまに  
マルあづけ

その日その日の  
お領解は  
その日その日の  
ソラゴト・タワゴト  
虚偽のほかなき  
われなれば  
日々ソラゴトに  
暮るるなれ  
ただ念佛の  
ほかはなき——  
ただ念佛の  
ほかはなき——  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

ともかくも  
弥陀にまかせて  
まいるべし  
極楽なりと  
地獄なりとも

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

どうする

ひと息 ひと息

生きてるが

ひと息 ひと息

死んでゆく

今のひと息

今、臨終——

後生 後生と

いうけれど

さあ 今、臨終

今の後生——

どうする

どうする

どうする

どうする

さあ さあ

この世でホトケに

ナムアミダブツ

いつも

おねんぶつ

おねんぶつ

み名呼べば

おねんぶつ

## あとがき

一月から二月にかけて知友の不幸が続き、きびしい無常を知らされました。一月十七日かねて療養中の小島りやう様が静かに往生。二十八日に一宮市の山内みどり様が、「みんなに御札を云つて下さい。そして念佛を忘れぬように」と遺言されて亡くなられました。二月に入つて八日に私と同年で名古屋西別院の川島了哲様が葬儀出席して倒れ、そのまま不帰の客となられ、十六日には私と同窓、同年の高松矩大教授の松本解雄様が、教え子の結婚式に行かれ、神戸の式場で急逝、今日、十九日は葬送の日とて、仏前に坐して謹んでお別れを惜しみ、去來する数々の思い出に万感胸にせまるものがありました。

散る桜、散る桜、のこる桜も散る桜  
七十を過ぎた私は「やがておあとから」と仏前でつぶやき、お念佛申させていただくばかりであります。

○

福島先生は非常にお弱りとのおしらせを奥様から頂き、この寒さの中をどうか堪え抜いて下さるようにと祈念申しておりました。八十六歳と存じますが、お来駕いただいた度ごとに「あなたは私より十五年あとまで生きて下さい」と、口癖のように仰言

つて、病氣勝ちの私を励まして下さいましたことが深く心に刻まれております。

友の死、師の病を知らされ、浅原才市の

うた 才市、六十五になるよ

いまの世のくれたのは

さきの世のよあけなり

ご恩うれしや

なむあみだぶつ

を思い浮かべ、命終即新生なり、と聞  
き、病と死の彼方まで、仏力によつて解決  
していただいていることのありがたさを、  
あらためて味わいました。それも三界孤獨  
の一人旅でなしに、御一緒して同悲同憂、  
更に同喜同感して下さる聖人のみ心を通し  
て、よき師よき友にまもられての人生の旅  
をよろこび、蓮如上人の

一人でもゆかねばならぬ旅なるを弥陀に  
ひかれて行くぞうれしき

の信昧を尊いきわみと仰ぎました。

○

急 告

池山先生著、近角先生跋の「意訳歎異抄」  
が再版されました。定価 五〇〇円。  
京都市下京区堀川通花屋町、  
百華苑発行。振替、京都三五七八八番  
であります。

## △御案内△

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。南区駄上町二の八八、

一道会館。

市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、

新瑞橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月三十四日、午前午後

昭和区小桜町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

定価 半年 五〇〇円 (送共)  
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八  
編集・发行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷  
印 刷 人 吉野穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八  
發 行 所 慈 光 社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番  
郵便番号 四五七